

# 石干見による淀川河口域生態系の発見

主任研究員 田口さつき

## 1 淀川河口域に注目するJF大阪市

大阪市漁業協同組合(以下、JF大阪市)は、淀川河口域の環境を改善することに長年取り組んできた。その理由は少なくとも、①歴史的に組合員が淀川河口域で漁業を営んできた、②組合員や職員は、ウナギやヤマトシジミといった、大阪料理界で再評価されている食材を提供し続けたいという思いが強い、③淀川の河口域の自然を再生することで、大阪湾や淀川の魚介類の産卵場、生育場を確保することにつながる、という3点である。

そのためJF大阪市は、淀川河口域において水質・底質の連続観測、淀川の上流域で活動する「京の川の恵みを活かす会」(以下、活かす会)との協力関係の構築、石干見<sup>いしひび</sup>の設置など様々な活動を行ってきた。

また2018年からは毎年、「淀川河口域を考える会」(以下、考える会)を開催し、関係者とこれらの活動の結果を情報共有している。

ここでは、「考える会」での報告をもとに、淀川河口域における石干見づくりおよび石干見漁の取組みをまとめることにする。

## 2 石干見設置の意義

石干見とは、沿岸に石を積み上げた囲いのような大型の漁具であり、満潮時に石積みの上を越えて囲いの中に入ってきた魚介類のうち、干潮時、沖合に出遅れ囲いの中に留められたものを採捕する漁法が石干見漁である。文化人類学者の西村朝日太郎氏はこの漁具を「生きている漁具の化石」と呼んだ。

JF大阪市が石干見を淀川河口域に設置したのは、大阪公立大学客員研究員であり、「活かす会」の代表を務める竹門康弘氏の提言がき

っかけである。竹門氏は生態学と河川工学の専門家であり、大阪湾から京都の鴨川まで遡上してくる天然アユが生息する豊かな水辺環境を取り戻す活動にも取り組んできた。特にアユの稚魚は冬に淀川河口域で暮らすこと(注1)から、JF大阪市と連携が進み、「考える会」の総括は竹門氏が行っている。

竹門氏の提言を受け、JF大阪市は石干見を研究している関西学院大学名誉教授の田和正孝氏(写真1右下)を訪問し、助言を求めた。そして20年に開催された第3回「考える会」では、田和氏が石干見の文化や歴史を解説したのち、JF大阪市が新たに石干見を設置する意義について、①ウォーターフロントの整備、②市民による干潟のアクセス、③生物観察の場の3点があると強調した。

## 3 石干見の設置過程

JF大阪市による石干見の設置は20年8月から始まった。JF大阪市職員の畑中啓吾氏、竹門氏、株式会社建設技術研究所の瀬口雄一氏(注2)が干潟造成後に残された石を利用し、淀川河口域の海老江干潟に土台を作った(写真1上)。土台は1年後も残っていたことから、その上に本格的に石を積むこととした。

そしてJF大阪市は21年、大阪市港区にある水族館「海遊館」とともに、中高生向けの石干見漁体験のイベントを行った(その後、石干見漁体験は毎年開催されている)。

## 4 生徒とともに観察

石干見漁体験の準備は、JF大阪市の畑中氏が担う。イベント当日は、竹門氏や田和氏が講師となり、石干見の解説、石干見漁におけ



写真1 上：海老江干潟の石干見設置時(2020年8月3日)、  
左下：開口部の網、右下：田和正孝氏  
(いずれも竹門康弘氏提供)

る注意点などを生徒に説明する。作業プロセスは、まず石を積み、石干見の開口部に網を設置し、引き潮によって石干見に閉じ込められた魚介類を網へと追い込む(写真1左下)。その後、網にかかった魚介類を観察する。種類別に個体数を記録してから、魚介類を放流する(写真2)。

この観察により、淀川河口域の状況が少しずつ明らかとなっている。例えば、21年には44匹のハゼ類が網にかかったが、そのうちのウロハゼは全長15cmを超えていた。22年6月には、オタマジャクシほどの大きさのハゼ類の稚魚770匹が網にかかり、海老江干潟が稚魚

(注1) アユの稚魚が冬に淀川河口域で暮らすことについては「活かす会」副代表の中筋祐司氏の観察によって明らかとなった。

(注2) 瀬口氏は、「考える会」の第4回で「淀川河口域を育む淀川の流量」、第6回で「アユの遡上について」という演題で報告をしている。



写真2 石干見漁体験後の記念写真と採捕されたマハゼとタイリクスズキ(2023年6月17日)  
(竹門康弘氏提供)

の成育場になっていることがわかった。また24年9月には、アイゴや全長70cm超のウナギもみられた。淀川河口域の干潟に様々な生き物が生息していることがわかってきた。

第5回と第7回の「考える会」では、石干見漁体験に参加した築港中学校の生徒が自らの体験を発表した。石積み作業を体験した生徒は、石を持って干潟のぬかるみを歩く苦労や、作業中にゴカイや小魚を発見した驚き、散乱しているゴミを見つけて環境について考えたことなどを報告した。また、石干見によって魚介類を実際に捕まえることができたときは、古代に石干見が考案されたことに驚き感動したと伝えた。

石干見設置により、JF大阪市は淀川河口域の重要性を多くの府民と共有することが可能になった。また、幼稚魚などの知見も増えてきた。JF大阪市は今後も、石干見漁体験会などの取組みを継続することで、淀川河口域の干潟などの環境を再生する機運を高め、北村英一郎代表理事組合長が提唱する「将来も河口域で魚が育つ環境を維持する」、「淀川、大阪湾の豊かさを府民と分かち合う」という未来の実現を目指す。

(たぐち さつき)